

## 『学習中の気分、思考の関連性について』の研究フィードバック

ML23-7001G 藁科 佳奈  
国里 愛彦

本研究は学習中の気分や思考の関連性について検討することを目的とし、クラウドソーシングサービスを用いてオンライン上で消去学習課題と質問による調査を行なった。消去学習課題は Norbury et al. (2022) で用いられている認知課題であった。この課題は、宇宙船を脱出するためにロボットからコインを集める設定となっており、参加者は、出会ったロボットが、コインを失うかどうかを予測して評価した。課題は3つの段階で構成されており、宇宙船内の場所1でのコインを失う機会がある段階、別の場所2でのコインを失わない段階、場所1でのコインを失わない段階があった。各段階の最後には、気分や思考についての質問があり、今回学習との関連を調べた気分や思考は、身体感覚、身体感覚に対する恐れに関する思考、不安、恐怖、逃避に関する思考、回避行動の傾向であった。最後に、不安感受性尺度 日本語版と Generalized Anxiety Disorder-7 日本語版による質問紙調査を行なった。

本研究にご協力いただいた参加者は302名であり、平均年齢43.58歳、標準偏差9.76歳であった。本研究で用いた消去学習課題において学習が生じていたことを確認し、その上で学習中の気分や思考の関連性について検討した。特に、最後の段階で場面1に戻った時に、予測した値が一時的に上昇していた。本研究ではこれを再発として検討した。検討においては、Norbury et al. (2022) で用いられている、学習中の推論の仕方における分類を用いた。この分類は、学習の推論を説明する潜在原因モデルに関するものであり、単一の原因に割り当てて推論する場合と複数の原因で推論する場合があった。そのため、本研究においても単一で推論する場合と複数の原因で推論する場合に分けて、各気分や思考の関連を調べた。

その結果、単一の原因に割り当てて推論する場合と複数の原因で推論する場合に、気分や思考の関連の仕方に違いが見られた。まず、単一の原因で割り当てて推論する場合と比較して複数の原因で推論する場合に、学習の過程で再発が顕在化しやすいと考えられた。複数の原因で推論する場合、再発の段階において、身体感覚に対する恐れが強くなる時に逃避に関する思考が強まる傾向があった。また、再発の段階において、不安が高まった時に逃避に関する信念は高まらなくなるが、回避行動は生じやすい可能性があるという特徴が見られた。

最後の不安感受性尺度と GAD-7 の調査からは、単一の原因の推論と複数の原因で推論する場合において、その得点の差は明確ではなく、尺度項目における関連についての結果も信頼性が不確かだった。

今回得られた示唆は今後、さらなる実際のデータでの検討を行うことで、現場にも生きる結果に繋がる可能性がある。